

---

# 朔夜～月のない夜に

めけめけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朔夜〜月のない夜に

### 【Nコード】

N7543Z

### 【作者名】

めけめけ

### 【あらすじ】

狼男といえば、『満月に変身して人を襲う』『銀の弾丸でしか倒せない』など、吸血鬼、人造人間と並んで日本でもポピュラーなモンスターです。

しかし、狼男の歴史的背景は、中世ヨーロッパ、或いはそれ以前の古代ヨーロッパ文明と大きく関わりがあり、この物語もヨーロッパのそつした歴史的背景の中で生まれた悲劇を描いていきます。

もともとこの作品は、関西で活躍されてるアコースティックデュオ  
Frameさんの『朔夜(sakuya)』という曲にインスピ  
レーションを受けて企画を練り始めた作品です。

もしも狼男が恋をしたら、新月に朔夜にしか愛し合うことができな  
いのではないか？

今回初めて日本以外の、しかも何世紀も前の世界を舞台とすること  
になり、どこまでそういつた雰囲気を出し、世界観を気づきあげる  
ことができるのか不安ではありますが、長期連載、そしてすでに作  
品として書き上げているある物語へと、この『朔夜』月のない夜』  
はつながっていくこととなります。

かなりの長期戦が予想されますが、どうか最期までお付き合いいた  
だけますようよろしくお願いします

## 第1話 闇の眷属

我は、闇の眷属なり。我、月の灯りとともにその姿を獣と変え、地を走り、闇を切り裂き、血を求めるなり。我の血は、神の理に叛き、闇に生き、光を忌み嫌うものなり。

人の言う。闇に落ちた魂は、卑しく、さもしく、汚らわしく、醜く、おぞましく、人の忌み嫌うものなり。

我、それを知らず。我、それを解せず。我、それを省みず。我、それを語らず。我、それを是とせず、非ともせず。

我、あるがままにある。ないものがないように我はそこにあつてほかのどこにもない。我の血は我の血であつて、人のそれにあらず。我は、闇の眷属なり。人と相容れず、相まみえず。相まみれば、切り裂き、噛み千切り、喰らい、血をすすするのみ。

我は、闇の眷属なり。我、月明かりに吼え、闇に潜み、闇に潜り、闇に疾走し、闇に疾駆する。人に出会えば人を喰らい、神に出会えば神を汚す。闇に生き、光を忌み嫌うものなり。

人の言う。闇に潜むものは、大きな目、大きな耳、大きな鼻、大きな口、大きな爪を持ち、闇に迷い込んだものを喰らうのだと。さにあらず。我の眼は、<sup>まは</sup>月を捜すためにこそあり。我の耳は風の音を聴くためにこそあり。我の鼻も我の顎も<sup>あき</sup>生きるためにこそあれ、殺すためにあるものにあらず。大きな爪も大地を駆けるためにこそあり。

我、望まず。月の光の命のまま、我の血の欲するままに闇を疾駆

するのみ。我、拒まず。月の光の命のまま、私の血の欲するままに咆哮するのみ。我駆けるところに人の血が流れるのも定め。我吼えるところに人の命尽きるのも定め。

我は、闇の眷属なり。

我は、闇の眷属なり。

「狼さん、大丈夫？ 痛くない？」

森の奥深く、一人の少女が怯えながら、震えながら立っている。その足元には、酷く傷ついた若い狼が横たわっている。普通の狼とは違い、その獣毛は、灰色というよりは銀色に輝き、風になびくほどに細く繊細である。

「大変、血がいつぱい出てるわ。なにかで、血を止めないと……」

少女は頭に被っていた赤い頭巾を取ると、恐る恐る狼に近づいた。

「ウルルルウルルウ……」

少女が近づく気配に、傷ついた狼は必死に抵抗をしようとするも、体が思うように動かない。そればかりか意識は途切れる寸前である。あまりにも多くの血が流れてしまった。このままでは死は免れようのないものとして、狼に訪れるであろう。

「大丈夫。大丈夫だから、私に任せて。出血を止めないと、助かるものも助からなくてよ」

少女は震える足で、一步一步、傷ついた狼を刺激しないように慎重に近づき、横たえる狼のすぐそばまで来ると、静かに腰を落とすた。

「ほら、大丈夫。怖くないわ。お願いだからおとなしくしてちょうだい。動くとき余計に傷口が開いてしまうわ」

赤い頭巾を取った少女の髪の毛が、木漏れ日を浴びて美しく輝く。気持ちの良い風が、森の中を駆け抜け、金色の髪が静かになびく。傷ついた狼は薄れ行く意識のなかで、その美しい光景を眺めていた。そして生まれてはじめて美しいものを美しいと思うことができた。

「傷口はここだけかしら……猟銃で撃たれたのね。弾を取り除いて傷口を塞げば助かるかもしれないわ」

銀色の狼は、後ろ足のモモの辺りから血を大量に流していた。良く見ると血の吹きだしている穴にどす黒い塊が見える。弾丸のようだ。少女はそれを取り除き、止血しようと言うのだ。

ニンゲンよ……我に触れば、汚れることになる。我の魂は闇に落ちたもの。我の血は人の魂も汚すほどの邪悪なものよ。我、ただの狼にあらず。人の言う。我ウエアウルフなり。闇の眷属にして、神に背を向け、闇に生きるものなり。

「狼さん、お願い。少しの間我慢してね。私に噛み付いたりしないでよ。悪いけど、その大きなお口は私にも恐ろしいの。弾丸を抜くまでの間、おとなしくしてもらうためには仕方がないのよ」

そういうと少女は頭巾にしていた布を狼の口に巻き、縛り付けた。銀色の狼は抵抗する素振りを見せたが、もはや少女の力にさえ抗うことができぬほどに弱りきっていた。そして少女は狼の大きな鼻先に顔を近づけ、狼の目を見ながらこういった。

「狼さん、よく聞いて。その大きな耳でちゃんと聞きなさいな。いいこと、これから私がすることは、とてもとても痛くてよ。もしかしたらあなたはその痛みに耐え切れずに死んでしまうかもしれないわ。でも、その痛みに耐える事ができれば、あなたは助かる事ができるかもしれない。ほんのわずかな可能性でも、それに賭けてみる

気はあつて？」

銀の狼は少女の美しい声に癒され、少女の若々しい香りに静められ、少女の美しくも力強い眼光に心奪われた。

「その気があるのなら、尾っぽを振るなり、耳を動かすなり、瞬きをするなり声を出すなりして御覧なさいな。さあ、あなたは『生』を望むの『死』を望むの？」

ニンゲンよ。我に問うか？我に生きるか死ぬかを問うというのか？

我、闇の眷属にして、神に背を向け、闇に生きるものなり。

我に望むも望まざるもない。

我、月の明かりの命のまま。我、汚れし血の欲するままに……

これも、運命か。

今宵は朔夜にて、月の光見えず。汚れし血は流れ出し、何も欲するところがない。

我……我は望むことを知らず。

ニンゲンよ。好きにするがいい。そなたにわが身を任せようぞ。

銀の狼は、尾を一度だけ動かし、耳を一度だけ立て、瞬きをし、かすれるような小さな声で鳴いた。

「覚悟はできているようね。いいわ。私に任せなさいな。あなたを死なせやしないわ。もう誰も、私の目の前で死なせたりするもので

す  
か  
「



## 第2話 金髪の少女

少女の目は、涙で潤んでいた。

「そう、もう誰も、死なせやしないんだから」

語気を荒げたのは、少女の本意ではなかった。目の前の狼をなるべく刺激してはいけない。

「あなた、運がよくてよ。私がここを通りかかることも、あなたのような獣を助けようと思うのも、少し前では考えられないことですもの」

通じるわけがないとわかっているにもかかわらず、少女は話さずにはいられなかった。傷つき横たわる狼の耳は、少女の声に反応しているようだったが、意味がわかるとは思っていなかった。

狼の大きな口は少女が身にまとっていた赤い頭巾によって縛られ、口を開くことができない。牙をなくした獣は、それでもおびえることもなく、ただじつと痛みに耐えているようだった。

「ちよつと待っててね。これは邪魔ね。いま支度をするから動かないのよ。動くとお血がひどくなるわ」

狼は左の後ろ足から大量の血を流していた。穴が開いている。どうやら猟銃で撃たれたようだった。少女の頭巾を狼の口に巻いてしまったことで、少女の金色の髪が風になびいて少女の視界を時々さえぎった。少女は立ち上がると、おもむろにスカートを捲り上げた。少女の白く透き通った肌があらわになる。太ももの辺りまで捲り上げるとそこにはベルトで何かが縛り付けてあった。

「失礼。ちよつとはしたくないけど、狼さんには関係ないかしら」

少女は右の太もみにナイフを隠し持っていた。刃渡りは15センチほどで、よく手入れがしてある。つまり切れ味がいいナイフである。

少女はまず、狼の口を縛った頭巾の余った部分をナイフで切り落とし、そこからさらに長さ15センチほどの切れ端を剥ぎ取り、金色に輝く髪の毛を結わくのに使った。

「これでよしと。じゃあはじめのわよ。まずは弾丸を抜かないと放っておいたらそこから毒が体中に回って、助からないわ。この痛みに耐えられることができれば、あなた、きっと生き残れるわ。だから、お願いじっとしててね。暴れたら余計なところを傷つけて、それこそ出血多量で死んでしまうわ」

少女は優しく、しかし強い口調で狼に話しかけた。そして、自分の顔を狼の鼻先に近づけて狼の目を見ながら言った。

「私を信じて。いいわね。私を信じるの。わかるわね」

狼はまるで話を通じたかのように、瞬きでそれに答えた。

「いいこね。じゃあ、始めるわよ」

少女は傷ついた銀色の狼の後ろ足をしっかりと左手で掴み、ナイフを傷口に滑らせた。一瞬狼は身体をピクツと動かししたが、激しい息遣いをしながら、痛みには耐えた。

「大丈夫。これならすぐに何とかなるわ。骨を砕いてはいらないよね。すごいわ。筋肉の力で弾丸が骨まで行くのを防いだのかしら」

少女には医学の知識があった。少女の父親は医者であった。そして母もその手伝いをしていた。知識は本で、技術は父から教わった。いつしか少女も家の手伝いをするようになった。そして本格的な医学の勉強をするために、家を出たのだが……

「私も獣の身体を見るのは始めてなのよ。でも、大丈夫。大体わかるわ……もう少し、もう少しで弾が取れるわ」

少女は起用にナイフを使い、狼の足の筋肉を傷つけないよう慎重に猟銃の弾を取り出そうとしていた。狼は出血が激しく、意識を保つことが難しくなってきた。すでに足の痛みは感じない。脳内

麻薬が大量に分泌され、現実と夢の区別もつかないような上体になつていた。

「もう少しよ。我慢して……」

少女の声が聞こえる。

なんだ。お前はそこで何をしてる？

我は、我は……闇の……闇の眷属なり

我は……

ついに狼の意識が途絶えた。狼は完全に現実の世界から離れてしまった。狼は大きな闇の塊の中にいた。前を見ても後ろを見ても、地面も空も、そこは闇しかなかった。

我は、闇の眷属なり。

我、あるところ、すなわち闇。

我、消滅するとも、闇は残る。

闇は、永遠に闇なのだ。

「生きるのよ！」

どこからともなく声が聞こえてくる。

「あなた、逝つたりしてはだめよ。もどてらっしやいな」

声がだんだん大きくなる。

「お願い、私のために、どうか生きてちょうだい。どうか死なないで、お願い」

我は、我は……

願うものの声を聴くもの

願うものの声に、耳を傾けるもの

願いをかなえるために

邪魔をするものを 噛み砕くもの

願いを見届けるもの  
願いがかなうのを……

否、我は闇の眷属なり。

神に背を向け、闇に生きるものなり。

神に背を向け、髪に背を……

「お願い、戻ってきて。私に希望を、生きることへの希望を……」  
少女の泣き叫ぶ声が聞こえた。  
狼の全身に電流が走る。

ぬうううううう！

なんだ。何だというのだ！

なぜ、我は震える

なぜ、我は怒る

なぜ、我は欲す

我は、我は……

銀色の狼は咆哮した。闇の中で咆哮した。闇は振るえ、怯えた。  
闇は、狼に怯えた。

我、行かん！

狼は疾走した。闇の中を疾走した。闇が狼にまとわりつく。狼は  
それを噛み千切った。

我、闇の眷属なり

闇よ！我を拒むか！

闇よ！我に従え！

我、闇の眷属なり

闇を従えるものなり！

狼の口から青白い炎のよなものが吹き出す。

ガールルルルルルル！

狼の咆哮に闇が触れ、闇がやみに解ける。解ける。解ける。

闇の一番薄くなったところに狼は飛び込んだ。闇は引きちぎられ、切り裂かれ、狼を解き放った。

ガールルルルルルル！

「よかった。よかった。大丈夫よ。心配はなくてよ」

金髪の少女は目に涙を浮かべながら叫んだ。

「私は神など信じない。私は命を、命の強さを信じるわ。でも、この世に本当に神様なんてものがいるのなら、よく聞きなさい！私は絶望はしない。絶対にあきらめない。あなたの無能をこの世にさらけ出してやるわ。命の強さを尊ぶ心こそ、世界を救えるのよ！あなたの助けなんて要らないんだから！」

ニンゲンの金髪の少女よ

我、闇の眷属なり

闇を従えるものなり

そして我、今よりそなたに従うものなり

狼は咆哮した。

ガールルルルルルル！

### 第3話 密会

銀色の狼に金髪の少女が出会う一か月ほど前、少女は暗闇の中にいた。それは銀色の狼の持つ闇とはまた違う、静かで、それでいて決して抗うことのできない自然の摂理。夜の闇の中で彼女は困惑していた。

「理にそむくものなどあつてはならないことだよ。クリス」

夜の闇はひんやりと静まり返り、ひそひそと話す声が、かえつてどこかの誰かに聞かれてしまうような感覚に襲われる。若い男は、闇に潜む何かに怯えていた。

「あなたの言う理ってなによ。あなたの理と私の理に違いがあるとしたら、それはどういうことかわかる？」

暗闇の中でもクリスと呼ばれる少女の髪の毛の色は輝いて見えた。クリスティヌ・クラウスもまた、闇の中の何かに怯えていた。しかしそれは、若い男のそれとは少し違っていた。

「君は間違っている。いや、間違っているのではなく。違ってしまうってるんだ。みんな君のお父様の……」

「ジャン、お願い、その話はやめてちょうだい。それに、私は何も間違つてはいないわ。そしてあなたもまちがつてはいない」

気持ちを抑えようとする少女の試みも、彼女を落ち着かせようとする彼の試みもまるで実を結びそうになかった。

「じゃあ、どうして。どうして君は僕の言うことを、みんなの言うことを信じてくれないんだ」

「だって、ジャン、魔女なんて」

「シーツ！声が大きいよクリス。こんな話をしているところを誰かに見られただけでも……」

「それがなによ！間違っていることは間違っているわ。どうしてオデットがあんなひどい目に」

「だってそれは」

「お願い、ジャン。助けてちょうだいオデットは私の大事な友達なの」

「クリス……僕は、僕には……」

「ジャン……世界の理なんて、誰がそのすべてを知るといえる？あなたの言っている理も私が言っている理も、広い世界の中のほんの一部でしかないのよ」

ジャンは大きな声で、しかし、誰にも聞かれないように細心の注意を払ってクリスに言った。

「クリス、神の教えに疑問を抱くというのは、神への冒瀆ということ以外なものでもないんだ。世界の理なんてどうでもいい。この町の、このローヴェイルこそが僕たちの世界だ」

クリスは早くこの不毛な会話から抜け出し、行動に移りたかった。しかし、何をどうすればいいのか、まったく考えが浮かばなかった。このままでは親友の命が危ない。あの可愛らしい、いたずらっぽく笑った顔がまるで妖精のような少女の命が危ないのである。ともかく協力者を得たいと思ったクリスは、のジャン・フォンテューヌに声をかけたが、やはり、魔女裁判に異議申し立てを立てることなど、この町の誰も出来ることではなかった。

魔女裁判　中世ヨーロッパにおいて、数百万人が犠牲になったといわれている。

ジャン・フォンテューヌはフランス東部の小さな町の実力者の息子であり、人望も厚い。クリスが彼を頼ったのは、もちろんそのことが一番の理由であるが、片田舎の小さな町で、数少ない『外の世界』を知るもの同士、魔女狩りなどというものがどれだけ理不尽か

つ不当なものであるか理解していると思つたからである。その考えは間違つてはないなかつた。

しかし

「いいかいクリステイーヌ。こんな話を誰かに聞かれるだけだつて、君も僕も危険なんだよ。今年は……今年には運が悪かつた。そしてオデットも」

「ちよつと待つてよ！運が悪いつて、運が悪いだけでどうして、私は大切な友人を失わなければならぬのよ。そんなこと。そんなことつて」

クリスは言葉を詰まらせた。クリスもわかっているのだ。今年は1720年は最悪な年だ。マルセイユで大発生した疫病は何万もの死者を出し、その被害はこの町にも及んでいる。天候が悪く農作物に甚大な被害がでている。誰だつて、何かのせいになりたい。その社会的被害妄想が生み出す悪臭こそ『魔女狩り』と呼ばれる生贄を捧げる儀式なのだ。クリスは考えている。しかし、それは都会に出て広く知識を得た人間の考えであり、閉鎖した小さな町の中では、万有引力も地動説も神や悪魔の仕業となんら区別はつかなくかつた。

「彼らに何を言つても無駄さ。君にもわかるだろう。それにオデットは……」

「オデットが何をしたというの。彼女は何も悪いことはしてない」  
クリスは友人の名誉を守るために語気を強く荒げた。そして次にはクリスは懇願する目でジャンを見つめてみたが、ジャンは視線をずらし、首を振るだけだつた。

「お願いだ。クリス。もうこれ以上、僕を困らせないでおくれ。それにこのままじゃ君にも害が及ぶかもしれない。もうこの話は終わりだ」



ジャンは苦悩した。ジャンにもクリスのいつていることが良くわかる。しかし、それでどうなることでもない。下手に同調し、クリスが無茶な行動を……たとえば他に協力者を仰ごうなどということにさせてはいけない。そんなことになれば、今度はクリスに身に危険が及ぶ。今は、こうするしかないんだ。そう自分に言い聞かせ、再びクリスに向き合った。

「もう、戻らないそろそろ誰か気づく頃だ。さあ、クリス。お願いだから僕の言うことを聞いておくれ」

ジャンの悲しそうな表情は、さらにクリスを悲しくさせた。私は今、二人の友人をなくそうとしている。でも、ジャンとの友情はまだ、壊れたわけではない。自分さえ、彼の進言を聞くのであれば……

「でも それは できないわ」

友達一人見捨てることで、それでその後の世界が変わらないわけがない。きつとうまく行かなくなる。守らないといけない。大切なものは、自らの手で守らなければならない。

それをしなかったことの後悔は、それをできなかったことの後悔より、深く、辛く、長いものになる。

金髪の少女は、そのことをよく知っていた。

## 第4話 父と娘と

クリスとジャン 二人が町外れの人気のない場所で密会し、別れてから30分もしないうちに、突然ジャンがクリスの家を訪ねてきた。

「クリス、もう一度話をしよう」

クリスは少し意外に思った。ジャンがどんなつもりでここまで来たのかを少し考えてみたが、今は万に一つの可能性でもすがりたい気持ちだった。

「だめよ。こんなところで話なんかできないわ。人目につくわよ」

「僕の家に来ればいい。大丈夫。人払いが出来る場所がある。そこなら誰かに見られたり聞かれたりする心配はないよ」

クリスの家は、町に二つしかない病院の一つである。東西に長く伸びた町の東のはずれにあるのがクリスの父親アベル・クラウスが営む小さな病院で、西にはベルモンド病院という大きな病院がある。アベルは一風変わった男で、町の人すべてに評判が言い訳ではない。それでも医者としての技術はなかなかのもので、ベルモンドとは使う異国の薬を処方したり、治療法も一風変わっていた。クリスは一娘でほかに兄弟はいない。母親を早くに病でなくし、アベルは男手一人で子供を育てることもできず、幼いクリスは遠縁の親戚の家に預けられた。クリスが故郷に戻ったのは2年ほど前、クリスが15歳になってからである。

ジャンは町の有力者、エリック・フォンテューヌの息子であり、クリスの5歳が上だが、どここな二人の関係はクリスのペースになっている。金色の美しい髪の少女は見た目の可憐さよりもはるかに闊達で、いささか男勝りのところもある。早くから親元を離れて暮らしたクリスの経験は、彼女を強く育てたということになる。しか

もクリスが預けられた親戚の家というのはフランスの南部マルセイユという港町で交易で盛んな場所である。エリック自信も数年ほどマルセイユで暮らしたこともあり、田舎町で数少ない外の町を知っているもの同士馬が合っていた。それもどちらかといえばエリックからの一方的なクリスへの好意であったから、余計にジャンはクリスに頭が上がらないことが多かった。

「君は今から20分ほどしたら診察用の支度をして……そう、急患でもでたような支度をして僕の家を訪ねてきておくれ。それで誰かに見られても怪しまれずに済む。いいね」

「ありがとう。ジャン。でも無理をしなくてもいいのよ。私は……」  
「心配は要らないよ。僕は君のことが心配なんだ。力になりたい」

ジャンはクリスの右手を静かに両手でやさしく包み込むようにして握り、クリスの顔の近くまで持ち上げた。クリスはジャンの手の甲に口づけをした。

「わかったわ。20分後ね。ありがとう。ジャン」

ジャンは静かに戸を閉めて、薄明かりのともる町の中へ姿を消していった。クリスは大きく深呼吸をして簡単な問診の支度を始めた。  
「クリス、帰ってたのか？」

部屋の奥からアレンの呼ぶ声が聞こえる。

「えー、今帰ったところなんだけれど、お父様、これからまた出かけなければならぬの」

クリスは手を休めることなく父親の言葉に対応した。

「こんな時間にかい。そりゃあ、ただごとじゃないようじゃな」

「そう、そうみたいなの。でも、大丈夫わたし一人でまいます」

「患者はオデットかい？」

クリスの手が一瞬とまる。

「可愛そうなことだ。だが誰も救うことはできない。この病は、本当に手ごわい」

クリスはドアの外の気配を気にしながら、ゆっくりと父親の声のする方向へ目を向けた。そこには心配そうに娘を見つめる父親の姿があった。クリスは思わず大声を出しそうになるのを懸命にこらえて、それでも激しい口調で思いをぶつけた。

「魔女狩りなんて馬鹿げているわ。お父様、そんなことで、大事なお友達を失うなんて、わたし……」

父親は娘の肩に手をかけて、悲しそうな顔をしながら答えた。

「そうじゃ。馬鹿げた話じゃ。科学の時代が来ようとしているこんな時代に魔女狩りなどと……しかし、今の医学や科学では病気で死に行く人を救うことは難しい。マルセイユが、あのマルセイユがとんでもないことになっているというじゃないか」

「でも、それは伝染病よ。悪魔の仕業でも神の天罰でもないわ。なにどうして魔女の仕業だなんて」

「そうじゃ。馬鹿げた話じゃ。しかし、その馬鹿げた話で、一人娘を危険な目に合わせることは、もっと馬鹿げた話だとは思わんかね。クリス」

ジャンの前では気丈に振舞っていたクリスも、父親の前ではまだ17歳の少女であった。クリスは泣き崩れ、父は娘をやさしく抱擁した。

「でも、わたし、行かなければならないの。ジャンが話を聞いてくれるといってくれたわ。それでどうなるかわからないけど、可能性を捨てたくないの。危ない前はいたしません。どうかこのままわたしをジャンの家まで行かせてください」

「クリス……ワシは母さんを救うことができなかった。その上娘も救えないとあっては、なんと悲しい人生だと思わんかね」

今度はクリスが父親をやさしく抱擁した。

「お父様、お父様はなすべきことをなさり、そしてお母様を救うことはできなかつた。でも、なせることをしなかつたわけではないでしょう？ わたしにはわかるの。お父様がわたしをマルセイユに預

けてまで、この町で医師として戦い抜くことを決心した理由が……だからお願い。わたしにもお父様のような強い生き方をさせてください。わたしはお父さんの子であり、朝ないころの記憶の中にしかない、やさしいお母さんの子なのです。クリスティー又は、お二人の名前を汚したりはしませんから」

クリスはアベルの額にそっと口付けをし、再び身支度を始めた。アベルはそんな娘の姿を少しの間、愛おしく見つめていたが、不意に何かを思い出した様子で部屋の奥に姿を消した。クリスはそのことに気づいていたが、一通りの荷物を確認し、すぐにでも外に出られるよう、身なりを整えていた。そこへアベルが戻ってきた。

「これを持っていきなさい」

「お父様それはなんですか？ わたしは何も危ないことをしようというのでは……」

「これは危ないことをするためではなく、危ないことを避けるためのものだよクリス」

父親の手には柄にきれいな装飾を施してある短剣が握られていた。探検は細身で柄から剣先まで15センチほどのものであった。短剣と一緒に皮でできた鞘もある。鞘には皮ひもが巻きつけてある。

「こんなものを診療かばんに入れてるのが見つかったらそれこそ大変なことになるわね」

そういうとクリスティー又は父親から鞘に収めた短剣を受け取り、突然スカートをまくり上げ、足を診療かばんの上に置くと白く細い太ももに短剣を縛り付けた。

「失礼。父親にも見せたくない失態ね」

クリスは父親に方目をつぶって見せた。父親は右手で目を多い、指の間からたくましい娘の姿を見ながら首を横に振った。

「時間よ、そろそろ行くわね」

「無理は行かんど。ジャン・フォンティー又はいい男だ。父親のエ

リックとワシとでは馬が合わんが、あれはあれで決して悪い男ではない。なにより町のことを第一に思っておる。力にはなってくれるかもしれんが、甘えてはいけないよ。それに……」

「安心してお父様。油断もしないわ」

父親の両方の頬にキスをし、クリスは家を飛び出した。

「神よ。あなたは妻までもか、まさか娘まで私から取り上げようというのですか？ あなたの罰は私にあるべきで、妻や娘には何の罪のないというのに」

父親は信じていない神に、ただ祈るしかなかった。

## 第5話 フォンテイーヌ邸へ

クリステイーヌ・クラウス 親しいものは少女をクリスと呼んだ。17歳の少女は見る者の目を引くような美しい金髪を後ろで結わき、さっそうと街を歩く姿は一見華やかに見えるが、彼女の性格は見た目のかわいらしさとは裏腹に、闊達で普通の同年代の男の子に比べてもたくましいといった感じであった。それは少女が幼少時代、親元を離れて暮らさなければならず、それなりの苦勞を積んできたこともあるが、だれの目にもそれ以上の何か……気品のようなものが備わっていたのは、少女の母親の血統がそうさせたのであることを知る者は少ない。

クリスの友人でこの町 フランスと神聖ローマ帝国の間に位置するローヴェルの町でクリスの血筋について知っているのはジャン・フォンテイーヌくらいのものである。クラリスは今、人目をしのんで夜の町中をジャンの屋敷へと急いでいた。急ぐクリスの右足には、違和感があった。その違和感の正体とはクリスの父、アベルが護身用にと持たせたものである。

「こんなものが役に立たないことを願いたいわ。もっとも役に立てられるときには迷わず使うつもりだけねど……」

クリスの住む小さな診療所を兼ねた家からジャンの屋敷までは急いで15分ほどの距離である。比較的治安のいい町とはいえ、女の一人歩きが物騒であることには変わりはない。まして、ここ最近はこの町の風紀は乱れている。天候不良、大都市での疫病の蔓延。人々の心はすさみ始めていた。

「でも、だからといって、魔女のせいだなんて」

クリスが危険を冒してまで、このように夜の町を友人のジャンを

頼っていくには十分な理由があつた。クリスの親友のオデットが、魔女裁判にかかり、幽閉されているのである。おそらくは今、このときも辛らつな尋問　「あれは尋問なんて生易しいものではないわ。拷問よ。どこの誰があのようなおぞましことを考え付いたのか知らないけれど、あんな目に合わされて正気でいられるはずはないわ」

このローヴェイルで魔女狩りが最期に行われたのは、クリスが生まれるよりもはるか前のことである。最盛期には毎年のように年老いた老婆や若い女性が異教徒、異端者として魔女裁判にかかり多くの場合は魔女として焼き殺された。そして最期まで魔女であることを否定したものは、拷問の末、命を落とし、死後の経過を見て、『魔女ではなかつた』ことが認められた。つまり、一度疑いをかけられれば、免れることはない。逃れるすべはないのである。そのような行為を蛮行として戒める布告も時の王朝によつてなされたが、飢饉や流行病が発生すると、人々はそれらの原因をすべて魔女の仕業として、犯人探しを始めるのである。そして、運の悪いことに、今年がまさに、そのような犯人探しをする年　ペストの流行で多くの人が犠牲になり、悪天候で農作物も不作で人々の暮らしは日に日にすさんでいったのである。

そしてその犠牲者にクリスの親友、町で裁縫を営むシヤリエール家の娘、オデットが選ばれたのである。なぜオデットに魔女の疑いがかつたのか、今のところクリスにもジャンにもわからなかつた。しかし、原因を突き止めたところでそれが怪傑に結びつくとは限らない。大事なことは魔女を探し出し、業火によつて焼き殺したところでこの町が抱える問題の何の解決にもならないということをも町の人々にわかしてもらつうしかないのだ。

「イングランドでは、魔女狩り将軍と呼ばれた男が、魔女裁判の蛮



行をやめさせよとした者の告発書によって失脚させられたと聞くわ。腕力や権力ではなく、告発書という文章によってそれがなされる時代に、どうしてまた魔女狩りなんかしなければならぬの」

クラリスはローヴィルの町で生まれたが、生まれてまもなくして母親が病死するとマルセイユの親戚の家に預けられたのである。マルセイユ地中海に面した港町でフランスの首都パリに告ぐ大都市である。交易が盛んでさまざまな国の船が行き交う。クラリスはそこでさまざまなものを見て育ってきた。外国語を学び、ローヴィルではなかなか手に入らないような海外の科学や医学に関する書物を熱心に読んだ。そしてその知識は、ローヴィルで一人診療所を営む父のためにいつか役に立つだろうと考えていたのである。

「オデットはやさしい子。あんなにやさしい子が魔女であるわけがないわ」

マルセイユからローヴィルに戻ったクリスに最初にできた友人がオデットであった。いつもそばかすを気にしていたオデット。赤毛がくりくりとカールを巻いて自分が裁縫した可愛い洋服がとっても似合っていた。クリスに会うたびに「何か困ったことはない？ 心配事があったら何でも相談して。わたしにできることがあったら、何でもしてあげるから」とマルセイユから着いたばかりで、右も左もわからないクリスを気遣ってくれた。

「オデットはいつもわたしに優しくしてくれた。わたしを助けてくれた。だから今度はわたしがオデットを助ける番よ」

金髪の少女は固い決意を持って町の有力者、エリック・フォンテーヌの住む屋敷の前へとたどり着いた。門の前ではエリックの息子、ジャンが待っていた。

「ジャン、迎えに出てくれたのね」

「クリス、いいかい。静かに、僕の後を着いてきて」

ジャンは門の扉を開けるとクリスを招き入れた。

「屋敷の中は人目につくから、使用人の部屋を人払いしてある。あそこなら誰にも気づかれなすむ」

「ごめんなさい、ジャン。あなたを巻き込んでしまつて」

「誤るのはまだ早いさ。まだ何も始まつちやいなんだから」

「そうね……ともかく、急ぎましよう。こうしている間にもオデットがどんなにつらい目にあつてゐるかと思つとわたし……」

「わかつてゐるよ。さあ、こつちだよ」

ジャンはクリスの大きな診療鞆を右手で持ち、左手でクリスの手を握り屋敷の入り口の前を通り過ぎ、左手にある小さな建物のほうへ小走りで進んでいた。不意にどこか遠くのほうで犬の遠吠えが聞こえた。一瞬二人は息を凝らして、周りを見渡す。クリスの長い夜が始まつた。

## 第6話 追跡者

フォンテイー又邸にとどろいた獣の遠吠えは、クリスとジャンだ  
けではなく、他の男の肝も冷やしていた。

「おい、今のは？」

「あれはどこかの野良犬の遠吠えじゃ」

「そうなのか？ 私には狼も犬も違いがわからん」

「やつは意味もなく吼えたりはしない」

「そういうものなのか？」

「なに。心配はいらん。お前さんはおとなしくこの町の宿で待つ  
ておればいい」

「いや、枢機卿より命を授かって降りますれば、そのようなわけに  
は……」

「ワシのそばが安全だと思っておるのなら、それはお前さんの勝手  
じゃ。じゃがワシの邪魔をするようなら」

「わかつておる」

漆黒の闇を走る1台の馬車の中には二人の男が向かい合って座っ  
ていた。一人はエドモンドという若い聖職者である。彼はひどく何  
かにおびえているようだった。

「イーベルハルト殿、本当に奴をしとめることができるのだな」

日が落ちて数刻、ようやく目的地のローヴィルの町にさしかかる  
うとしたところで、遠くの闇から不意に獣の遠吠えがした。いつも  
であればなんでもないような犬の遠吠えも、エドモンドにはひどく  
恐ろしいものに聞こえたようだ。

「それに関しては、どう回答したらよいのか難しいですな。まあ、  
わし以外の人間に依頼してそれがかなう確率よりは、はるかに高い  
とだけ申し上げておきましょう」

エーベルハルトと呼ばれた男は、身なりは貴族のようであるが、背筋はピンと伸び、彼の目つきは何者にも臆することのない激しい気性が見て取れた。アゴに蓄えた髭には、白いものが混じっている。彼はその髭を右手で触りながら、不機嫌そうにエドモンドをにらみつけていた。

「聞くところによれば、身の丈は人のそれをはるかに声、大木もへし折るようなものすごい力を持ち、その爪にかかれば、人の頭など簡単にもぎ取られるというではないか。そのような化け物に我々二人だけでどうにかしようなどと、枢機卿は一体全体何を考えておられるのか」

最初はエーベルハルトに向かって自分の置かれた立場の不遇さを訴えるつもりで話し始めたエドモンドであったが、唯一の話し相手であるエーベルハルトがあまりにも怪訝そうな目でにらみつけるものだから、いたたまれなくなり、しまいには横を向いてブツブツと言葉を続けるしかなくなってしまった。エドモンドが臆病で卑屈なことよりもエーベルハルトの迫力が圧倒的な要因となっていたことは、ある意味彼の救いであつたのかもしれない。

「ローヴィルには古い友人がおる。彼の協力が仰げれば、司祭の不安も少しは解消されましょう」

今度はエーベルハルトがエドモンドの視線をはずした。エーベルハルトにとって、ローヴィルの古い友人の協力を仰ぐためにエドモンドの存在は、迷惑の上なかつた。が、その不満は当の本人の負うべき責任でないことをエーベルハルトは知っていた。

「枢機卿がどういふつもりで我々にこの任を任せたのかはいささか気になるところではあるが、そんなことを我々が考えても仕方のないことだ。先は長い。お互いに足の引つ張り合いだけはしないようにすることを、ワシは提案する」

エドモンドには選択肢はなかつた。ともかくエーベルハルトが早

く仕事を済ませれば、自分もこの理不尽この上ない状況から抜け出すことができるのである。彼は誠心誠意の笑顔でパートナーの申し出に答えたが、残念ながらエーベルハルトには卑屈な笑顔にしか見えなかった。

「心配はいらん。奴はきつとこのローヴィルの森に潜んでいるさ」  
エーベルハルトの言葉は、エドモンドを励ますためのものであったが、結果的にはエドモンドを不安にさせた。それはエドモンドが卑屈で臆病で、武器ひとつ扱えないような役立たずだからおびえているのではない。それほどに彼らの追っている相手は凶暴で、凶悪で、強大であった。

「狼男など、とうの昔に滅んだと思ったのじゃが……」

そう、彼らは狼男を追って、ローヴィルに向かっているのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7543z/>

---

朔夜～月のない夜に

2012年1月9日00時48分発行